

## 研究論文

## 「ケア」をめぐるアポリア

## 「ケア」の理論的系譜

齋藤真緒<sup>1)</sup>

## The aporia of care

## — A theoretical genealogy of care —

SAITO Mao

This paper is a preliminary study of the concept of “care”. In the first section, I examine the theoretical construction of “care”, by examining the debates about the ethics of care and the ethics of justice. Furthermore, I examine the aporia of “care” in the historical context of capitalism and “emotional labor”, as well as the welfare state and the idea of “belonging.” On the basis of this analysis, I offer a new perspective of the concept of “care” that sees “care” as a spectrum.

**Key words** : care, the ethics of care, the ethics of justice, emotional labor, belonging

**キーワード** : ケア, ケアの倫理, 正義の倫理, 感情労働, 帰属

## はじめに

対人援助をめぐるサービス提供のあり方とその質が、いま大きな社会的関心となっている。介護保険導入後、介護の「社会化」が促進されることによって、グループホームなどの取り組みが注目される一方で、介護を媒介とした詐欺や暴力という問題も生じている。また、こうしたサービスが、従来家族の中で行われてきたということとも相まって、対人援助のあり方を考えていく上で、家族をどう位置づけるのかということも無視できない。人間にかかわるサービスであるがゆえに、当事者自身の「思い」や周囲との人間関係の問題が、対人援助の場面に輻輳して顕在化している。

こうした対人援助にかかわる一連の問題は、近年、「ケア」<sup>1)</sup>をめぐる問題群として、様々な研究分野において注目されている。それは、「ケア」という観点から、人間と人間との結びつきの有り様やその相互行為の特質を明らかにしたり、従来の人間観をも問い直す視点をもたらすものとされている。では、対人援助場面で日々生成されている「ケア」は、どのような理論構図で捉えることが可能なのだろうか。

本稿は「ケア」に関する予備的考察である。本稿では、「ケア」論の理論的系譜を辿りながら、これからの「ケア」論にとって必要な視角を明らかにすることによって、「ケア」というパースペクティブから新しい対人援助の可能性を探ってみたい。

1) 立命館大学衣笠総合研究機構ポストドクトラルフェロー

## 1. 「ケア」というパースペクティブ - 「ケアの倫理」を中心として

最近の「ケア」論の動向としては、「ケア」に関する哲学的・原理的把握、医療や看護における「ケア」の意義（「治療(cure)」との対比<sup>2)</sup>）、新しい生命倫理としての「ケア」、臨床哲学への応用などが挙げられる。そして「ケア」に関する多くの考察は、ケアの肯定的評価と現代的意義の（再）確認という点で、共通性を有している。高橋隆雄（2001）は、「ケア」というパースペクティブの構成要素として、以下の二点を挙げている。一つは、自他関係に関する特徴である。「ケア」とは、自他の受苦性を前提としており、「ケア」を媒介とする関係は、不可避的な共感、自他の間の相互承認と互惠性、相手の要求の了解・応答（責任）を含むとされる。もう一つは、対象把握における特徴である。「ケア」というパースペクティブは、あくまでも対象と状況の個別性を重視し、対象を全体として把握するという意義をもっているとされる。

では、こうした「ケア」というパースペクティブは、対人援助に関する問題群と向き合う際に、いかなる意義をもちうるのだろうか。

「ケア」というパースペクティブの背景のひとつとして、1980年代のフェミニズムによる「ケア」の社会的位置に関する倫理的考察、具体的には「ケアの倫理」とそれをめぐって展開された論争を挙げることができる。そしてこの論争は、「ケア」というパースペクティブとのかかわりにおいては、「ケアの倫理」と「正義の倫理」をめぐる論争として位置づけられている。日本における「ケア」に関する論考の多くも、「ケアの倫理」をめぐる論争を、少なからず継承あるいは参照している。以下では、「ケアの倫理」の内容、さらには「ケアの倫理」と「正義の倫理」をめぐる論争を整理しながら、

「ケア」というパースペクティブについて考えてみたい。

### 1-1 「ケアの倫理」

「ケアの倫理」は、1982年に、アメリカの発達心理学者であるキャロル・ギリガンが発表した『もう一つの声』に端を発している（Gilligan, 1982=1986）。この論文は、人間の道徳発達における性差の問題を取り扱ったものである。ギリガンが批判の対象としているのは、それまで道徳発達論に影響を及ぼしてきたローレンス・コールバーグの道徳発達段階モデルである。コールバーグは、人間の道徳発達に、3つのレベルと6つの段階を想定し、利己的なレベルから、社会秩序の維持、そして普遍的な道徳原理へと、道徳的判断の基準が発展するモデルを提示しているが、ギリガンは、こうした発達段階が、暗に男性を想定としたものであると批判した。コールバーグが、あらゆる個人を等しく尊重するという「正義」を高次の道徳発達として位置づけるのに対して、ギリガンは、大学生のアイデンティティ形成や妊娠中絶の決定に関する実証的研究から、発達段階での道徳的葛藤という経験において、葛藤解決の方法が、必ずしも「正義」という観点だけではなく、様々な思考形態があることを導き出している。ここで「正義」に対置されるのが「ケア」という考え方であり、それは多くの場合女性と密接に結びついているとされる。女性は、直面する道徳的葛藤を、形式的・抽象的な考え方ではなく、そこでの個別具体的な人間関係の維持・調和や、感情、さらには前後関係を重んじる「物語的な考え方」をする。ここから、他者を思いやるという感情に根ざした「ケア」という道徳性、そして「誰一人として傷つけられるべきではない」（「非暴力」）という、「もうひとつ」の倫理が提起される<sup>3)</sup>。

コールバーグおよびギリガンの主張に対して

は、その理論的・実証的妥当性という点から多くの批判が寄せられているが、そうした個別の批判を越えて、ギリガンの主張が「ケアの倫理」として、そしてその対極としてコールバーグの主張が「正義の倫理」として定式化され、この2つの倫理をめぐる論争へと発展していったのである。

### 1 - 2 「ケアの倫理」vs「正義の倫理」

「ケアの倫理」と「正義の倫理」をめぐる論争は、当初は道徳発達に関する論争であったが、それは、西欧近代における自律した個人という人間像に対する問い直し、さらには社会の倫理的基礎づけという、より大きな論点へ発展し続けている。では、「ケアの倫理」と「正義の倫理」との関係性をどのように考えればよいのだろうか。そこから、「ケア」をめぐるどのような問題が見えてくるだろうか。

多くの論者が「ケアの倫理」と「正義の倫理」との関係性について、いくつか分類を試みているが、包括的な分類としては、中村直美(2001)による分類をあげることができるだろう。中村は二つの倫理の関係性に対する理解を五つに分類している。以下、中村の整理に即して、それぞれの理解の特徴を見てみたい。

まず第一の理解は、性差の固定化の危険性という観点から、「ケアの倫理」を否定する考え（「ケアの倫理」否認説）である。これは、ギリガンの論文が発表された直後から、フェミニズム関連の雑誌を中心に議論されている<sup>4)</sup>。ギリガンの議論は、当時フェミニズムが直面していた「差異」と「平等」をめぐる理論的対立と接合され、ギリガンは、差異派の論客として位置づけられた。こうした理解は、ギリガンの主張が、性差の解消を志向するFeminist Ethicsとの対比において、Feminine Ethicsとして分類されることに象徴的に示されている（Reich, 1995：掛川, 1993）。

第二の理解は、「ケアの倫理」を「正義の倫理」に同化（吸収）する立場（同化・吸収説）である。ここには、コールバーグ（1995=1992）や、ジョン・ロールズの正義論をフェミニズムの視点から考察しているスーザン・M・オーキンなどが位置づけられている。しかし、中村自身が指摘しているように、「ケアの意味をあまりに一般的な意味へと遡及させてしまうと、正義の倫理との対照におけるケアの倫理の意味が希薄化してしま」い、「ケアの倫理」がその対象として射程におさめようとしていた個別具体的な人間の「ケア」への欲求やニーズという意図が反映されているとは言い難い（中村, 2001）。

第三の理解は、第二の理解の逆転として、「ケアの倫理」の称揚、すなわち、「正義の倫理」に対する「ケアの倫理」の優位を強調する（ケア優位説）考えである。ここには、ギリガンと並んで「ケアの倫理」のもう一人の論客としてしばしば取り上げられることの多いネル・ノッティングス（1994=1997）や、ヴァージニア・ヘルド（1995）が位置づけられている。ノッティングスは、「ケアの倫理」を相互性（reciprocity）の倫理として位置づけており、倫理学における受容性（receptivity）、関係性（relatedness）、応答性（responsiveness）という観点の重要性を強調している<sup>5)</sup>。

第四の理解は、「ケアの倫理」と「正義の倫理」は統合不可能とする立場（統合不可能説）である。この立場の論客として挙げられている立山善康（1990, 1995）によれば、「ケアの倫理」と「正義の倫理」とはそれぞれ「善（good）」と「正しさ（right）」に由来する、次元を異にする対立的概念であり、両者を同一の地平で統合することは「原理的」に不可能であると考えられている。しかし、実際の価値判断においては、必然的に両方の次元を考慮しなければならない。つまり、実践的な価値判断の場

面において、二つの異なる契機の矛盾・葛藤を経由して「ケアの倫理」と「正義の倫理」とが統合される。

最後の理解は、分類を行った中村自身の主張でもあるが、「ケアの倫理」と「正義の倫理」を相互に補完しあうものとして捉える立場（統合可能説）である（Baier, 1992 : 1995 : Tronto, 1987）。ここでは、第四の見解と同様に、「ケアの倫理」は、「正義の倫理」との関係において、アポリアとして位置づけられている。しかし、第五の見解が第四の見解と異なるのは、このアポリアとしての「ケア」を積極的に捉えることにある。中山自身はこの説を、「両者の違いを十分考慮する点で同化説と異なり、両者の相互依存関係を強調する点で統合不可能説と異なる」（中村, 2001, 97頁）としている。

### 1-3 アポリアとしての「ケア」

「ケアの倫理」と「正義の倫理」との間の論争、さらには「ケアの倫理」の学際的応用は現在も進行中である。しかし、「ケア」をめぐるアポリアを軽視し、「ケアの倫理」のみを優先させてしまうのではなく（第3の理解）、そこでの葛藤に積極的に向き合うという姿勢は、「ケア」を論じるに非常に重要な視点である。こうした発想は、近代的な個人観・人間観の捉え直しへとつながっており、法哲学（西田, 1995）、あるいは臨床哲学（中岡, 2001 : 森村, 2000 : 鷲田, 1999 : 2001）の領域で、こうしたアポリアの積極的統合が模索されている。また、「ケア」対「正義」という議論を、近代における「親密圏」対「公共圏」をめぐる議論と重ね合わせる試みも行われている（齋藤, 2000 : 佐藤, 1996 : 三品, 1998）。しかし何よりも、「ケア」をめぐるアポリアを活かしたパースペクティヴは、具体的な臨床的研究を通じて個別に検証されてこそ、生命力をもちうるものである。こうした知的作業は、近年ようやく

社会学の領域においても意識され始めている（浅野, 2001 : 大村編, 2000 : 野口 : 2002など）。今後も、臨床研究という点を意識した「臨床社会学」の研究領域として、「ケア」の場面をめぐる生起する人間関係の摩擦や緊張、あるいは個人のライフヒストリーの変容（ナラティブ・セラピー）についての丹念な記述と分析を蓄積していくことが求められている<sup>6)</sup>。ここに、「ケア」というパースペクティヴが果たしうる可能性が秘められている。

しかし、臨床場面での研究を通じた「ケア」をめぐるアポリアの統合の可能性を追求する際に、そこで模索されるべき新しい「ケア」のあり方とはいかなるものかという問題に直面する。換言すれば、なぜ今改めて「ケア」が問われているのか、あるいはどのような「ケア」のあり方が問われているのかという、「ケア」に関する歴史的コンテクストの問題が存在している。

「ケア」をめぐる「物語」は、とかく「美しい」ストーリーとして語られることが多い。しかし、「ケア」を媒介とする人間関係に密接に関連しているジェンダー問題や、虐待やドメスティック・バイオレンスといった親密な関係性における暴力を回避することはできない。こうした「ケア」をめぐる「影」の側面を、「ケア」というパースペクティヴの理論化において、どのように考えることができるだろうか。

以下では、「ケア」をめぐる歴史的コンテクストについて、資本主義と「ケア」の「商品化」＝「感情労働」という問題、そして福祉国家と「ケア」という、二つの点から考えてみたい。

## 2. 「ケアの社会化」と「感情労働」

「ケア」に関する理論的動向の背景には、それを受容あるいは喚起する社会的基盤としての

現実的問題がある。今日の「ケア」をめぐる問題としては、なによりもまず、「ケアの社会化」という問題を指摘することができるだろう（市野川，2000；上野他，2002；広井，2000など）。「ケアの社会化」は、日本では介護保険の導入など、社会保障制度改革と密接に関わっている。このことは、従来「ケア」が担われてきた領域としての家族にも大きな影響を及ぼすと同時に、「ケア」と密接に関わっているジェンダー問題を顕在化させることにつながっている。さらに、「ケアの社会化」の問題が先鋭化する背景には、資本主義経済の発展過程における「ケア」の「商品化」、すなわち「感情労働」をめぐる問題がある。ここでは、「感情労働」に関する考察を手がかりにして、「ケア」の歴史的位相について考えてみたい。

## 2 - 1 「感情労働」をめぐる問題

「感情労働」という問題をいち早く指摘したのは、感情社会学の創始者であるアーリー・ホックシールド（1983=2000）である。ホックシールドは、資本主義の進展過程において、感情の「商品化」という全く新しい性質の商品の登場に着目した。サービス業や対人援助の仕事にたずさわる「感情労働」者は、自分の人格と深く結びついた表情や感情をひとつの資源としながら、公的なサービスとして適切な感情表現を求められるようになる。ホックシールドは、フライトアテンダントの事例などを挙げながら、こうした「感情労働」者の「ケア」の特性について、「感情労働」において提供される感情の有り様 - 「表層演技」と「深層演技」 - を分析している。そしてホックシールドの何よりも重要な功績は、「感情」がなによりもまず社会的に構築されたものであるという「感情」に対する社会学的な視点の確立に求められる（岡原他，1997；岡原，1998）。

マイケル・ハート（1999）は、「感情労働」

について、道具的行為とコミュニケーション的行為が交錯する「非物質的労働」のひとつとして位置づけ、この労働が、グローバル化する資本主義経済の中で、支配的地位を獲得しつつあるとしている<sup>7)</sup>。では、「感情労働」とはいかなる特質をもつ労働なのか。少し長いですが、ハートの説明を引用してみたい。

「この労働は非物質的なものである。というのは、それが身体にかかわるものであれ感情にかかわるものであれ、その生産物（安心の感情や幸福感、満足、興奮、情熱、あるいは深い関わり意識や、共同体の感情といったもの）には手で触れることができないからである。人間の内部に向けられたサービス、あるいは親密さのサービスといった範疇が、この種の労働に適應される。しかし、この労働にとって本質的なのは、その「人間の内部に向けられた」局面であり、情動の創造と操作そのものなのである。このような情動の生産と交換、コミュニケーションは、一般的に言って、人間の出会い、つまり現実の他者の存在に結びついたものである。... 情動にかかわる労働が生み出すのは、社会的ネットワークであり、もろもろの共同体の形態であり、バイオパワーなのである」（ハート，1999，21 - 22頁）

このように、「感情労働」とは、身体接触や感情移入を介した人間の相互行為とコミュニケーションの中に根を張っていて、人間の出会いと親密な関係性を必然的に要求する。こうしたハートの理解は、スーザン・ヒメルヴァイト（1995=1996）による「感情労働」の「二重性」という指摘につながるものである。つまり「感情労働」とは、感情と労働という二つの要素の結合体、すなわち「対人関係的な愛情を伴った相互行為と、単なる身体的行為（労働）」（渋谷，2000，81頁）という二層構造になっている。渋谷望は、ホックシールドが捉えられなかった側面として、介護や看護といった長期にわたっ

て相手とのかかわり合いが要求される際に直面する諸問題、あるいは「利用者本位」や「選択」といった「ケア」サービスの「質」の追求といった問題も指摘している。「ケア」の「商品化」において、「親密性」という側面をどのように担保するか、ここに、「ケア」というアポリアの今日的形態を見いだすことができる。

「感情労働」については、介護や看護といった領域を中心として様々な考察があるが、こうした議論を、「感情労働」における二重性という問題と結びつけて整理すると、ひとつの問題点が浮かび上がってくる。

ヒメルヴァイトは、「感情労働」に含まれている対人関係的な情緒的側面を積極的に評価しようとしている。これは、ハートが、「感情労働」を通じて形成されるネットワークがもつ社会的潜在力に注目していることと近い発想である。こうした考え方は、前節で見た「ケアの倫理」優位説と相通じるものがある。また看護学分野の研究では、ホックシールドの議論が「身体-精神の二分法」として批判される場合がある。パム・スミス(1992=2000)は、こうした批判の基底にある考え方として、ルーベル・ベナー(1989=1999)の「ケア」に対する哲学的なアプローチを挙げている。ベナーによれば、「ケア」は、身体-精神の分裂を超越し、看護婦と患者との間の結びつきを可能にするものである。看護学を中心としたこうした議論においては、「ケア」は、アポリアというよりはむしろ、新たなオルタナティブをもたらさうものとして位置づけられている。

しかし、あえて「感情労働」の二重性、「ケア」が孕んでいるアポリアを、すぐに「解消」あるいは「止揚」せずに、あえてそのアポリアの中に身を置き続けることによって見えてくる地平はないのだろうか。あるいは、こうした「ケア」の肯定的側面への注目によって、隠蔽されてしまう問題はないのだろうか。

以下では、「ケア」というパースペクティブにおいて軽視されがちな、「ケア」の「影」の部分として、ジェンダーと暴力の問題について考えてみたい。

## 2-2 「ケア」とジェンダー

「感情労働」をめぐる問題を考える際に念頭におかなければならないこと-ホックシールド(1989=1990)自身は「感情労働」問題の射程に含めていたことであるが-は、それがもともと担われていた領域およびその担い手、すなわち家庭の中での女性の「ケア」という問題である。

従来「ケア」は、家庭内の女性の役割として、位置づけられてきたため、それは「アンペイドワーク」であった(春日,1998:2001:川崎・中村編,2000:杉本:2000)。それゆえに「ケアの社会化」=「感情労働」化は、アンペイドワークの「ペイドワーク化」という側面をもっている。しかし渋谷(2000)も指摘しているように、「ケアの社会化」という局面において、ジェンダーの問題が十分意識化されていないために、「ケア」は低い社会的・経済的評価を引きずったまま、ペイドワーク化される傾向がある。ヘルパー問題に象徴されているように、「感情労働」の多くは、その労働の使用価値の側面における有用性にもかかわらず、ペイドワークとしては正当な評価を受けているとは言い難い。さらに、経済のグローバル化という今日の資本主義の局面においては、アンペイドワークとしての「ケア」のグローバルな再編という問題-「ケア」の国際分業問題(パレーニャス,2002)-も浮上している。こうした問題が示しているのは、「ケア」の親密性・私事性が、ジェンダーという社会的支配関係と強い磁力で結びつけられているという現実である。

また、「ケア」し「ケア」されるという関係性の特徴は、その非対称性にある。とりわけ親

密な関係性における非対称性は、支配や暴力の温床となりやすい（Ruddick, 1995）。「親密性の暴露（disclosing intimacy）」（Lynn, 1998）の中で繰り返される身体接触や感情移入は、自他融合の感覚を産みだし、相手が他者であるという事実を見えにくくしてしまう。そしてここにもジェンダーの問題が根深くかかわっている。たとえば内藤和美（2000）は、「ケア」という関係性において、「ケア」される側の存在が先にあり（「他者優先」）、またその存在の有り様が両者の関係性を規定する（「他者次第」）ことに注目し、「ケア」をする側（ほとんどの場合女性）の「主体性の空洞化」を指摘している。ここに、「ケア」を媒介とする関係性の困難が示されている。

「ケア」を媒介とする関係に潜む権力や支配、そして暴力という問題を明らかにするうえで、ジェンダーという視点は重要である。ジェンダーという視点を通じて見えてくる、「ケア」をする側の「主体性の空洞化」という問題は、男性と女性という関係性にもみ当てはまるものではなく、介護や子どもの養育、あるいは対人援助場面での「ケア」し「ケア」される関係性など、あらゆる「ケア」を媒介とする関係性に通じる。しかし、「ケア」を媒介とする支配には、逆のケースもありうる。例えば、高齢者虐待という形で介護をする側からの暴力や、親による子どもに対する虐待である。つまり、「ケア」を媒介とする関係性は、「ケア」をする側の「主体性の空洞化」のみならず、「ケア」を通じた支配という問題を生み出すこともある。ここに、「ケア」という関係の非対称性が孕むより根源的な問題がある。

さらに、「ケア」における非対称性という問題を考えるにあたっては、ジェンダーという視点だけではなく、「近代家族」の問題を視野に入れる必要がある。

「近代家族」には、男性と女性との関係性だ

けではなく、親と子どもというもう一つの基軸がある（田間, 2001）。そして「近代家族」における「ケア」をする側の「主体性の空洞化」がもっとも強化されるのは、二つの基軸が交錯する地点、すなわち、母親と子どもとの関係性においてである。母親の子どもに対する一方的な献身性、こうした母-子間の関係様式としてのマザーリングが、もっとも望ましい「ケア」のあり方＝「ケアモデル」として位置づけられているのである（Turney, 2001）。フェミニズムは、「母性愛」の神話性を主張してきたが、「ケアモデル」としてのマザーリングの問題を考えるにあたっては、ジェンダーという視点のみならず、男女と親子が交錯する「近代家族」における「ケア」の重層的構造について、さらに考察を深める必要がある（斎藤, 1999: 2000, 小嶋・斎藤, 2002）。

今日の「ケアの社会化」、「感情労働」化に示されている「ケア」の二重性、そして「ケア」を媒介として要求される親密さに孕まれている支配や暴力という重層構造は、「ケア」に孕まれる危うさを示している。「ケア」をめぐるアポリアに向き合う際、「ケア」というパースペクティブを肯定的に受容する傾向が強いが、それゆえに、「ケア」が孕む危険性という問題を射程に入れることは、新しい「ケア」の可能性を考える上でも重要である。

では、こうした困難性を包含している「ケア」をめぐる関係性に、いかなる可能性を見いだすことはできるのだろうか。見いだせるとすれば、それはどのような関係のあり方なのだろうか。これがこれからの「ケア」論の理論的課題である。以下では、こうした理論的課題を考えるひとつの手がかりとして、福祉国家と「帰属（belonging）」という問題を取り上げてみたい。

### 3 アポリアとしての「ケア」から スペクトラムとしての「ケア」へ

#### 3-1 ケアと「帰属」-イグナティエフの問題提起

「帰属」の現代的意義について問題提起を行ったのは、マイケル・イグナティエフ(1984=1999:1993=1996:2001)である。イグナティエフは、「帰属」という観点から、福祉国家における「ケア」ニーズの充足のあり方とその変容に着目している。まずここでは、イグナティエフの議論を整理し、「帰属」と「ケア」との関係性について考えてみたい<sup>8)</sup>。

イグナティエフによれば、福祉国家とは、見知らぬ他人同士の連帯・分業を媒介とすることによって、個人のニーズを権利へ、そして権利を実際の「ケア」へと変える「転換作用」(イグナティエフ,1984=1999,16頁)の役割を果たしている。福祉国家の下での個人のニーズは権利に属する言語体系(「権利言語」)によって構成される。このことは、「ケア」ニーズが権利を有した個人の「自立」と密接に結びつけられることを意味している。こうして福祉国家は、顔も知らない者同士が支え合う「非人称的連帯」を促進する。また、国家という動脈を介して提供されるこうした「ケア」は、ソーシャルワーカー・法律家・教師といった専門家によって「定義」され、「管理」されることになる。

それに対してイグナティエフが目指すのは、福祉国家の前提条件である「自立」に収斂されないニーズの増大である。それは何か?「見知らぬ人」との間でのニーズの充足だけではなく、「知っている人」との間の関係性に対するニーズ、すなわち「帰属」に対するニーズである。イグナティエフは、「帰属」を「理解し理解されているというある特殊な感情」(同前,200頁)としている。「帰属」は、「愛情、尊敬、他者との連帯」とも言い換えられており、

それは「品位ある生にとって本質的に必要とされているもの」とされる。こうしたイグナティエフの「帰属」の位置づけは、一見、ヒメルヴァイトやハートの議論と同一の地平にあるように思われる。しかし、イグナティエフの主張が「ケア」論にとって示唆に富むと思われるのは、「帰属」が実現される「場」についての考察である。では、現代社会の「帰属」は、どのようにして実現可能なのだろうか。

#### 3-2 スペクトラムとしての「ケア」の方へ

「帰属」の「場」は、しばしばノスタルジックに、永続性や普遍性と結びつけられて連想されがちである。しかし、「故郷とは、私たちが成長して自分自身になるために、そこを立ち去らなければならない場所のことである」(同前195頁)。モダニティにおける「帰属」感情が、常に自由という「双子の渴望」(同前,202頁)というもう一つの極との葛藤におかれ、相互規定の関係であるとすれば、こうした葛藤は、解消されるべきものではなく、むしろ近代における「帰属」の成立における必要条件ということになる。こうした「帰属」をめぐる葛藤は、「ケア」をめぐるアポリアと、パラレルな関係にあると言える。

従来、「帰属」に対するニーズの充足は、「近代家族」の役割として位置づけられており、「帰属」が求める親密性は、この「近代家族」というブラックボックスの中に封印されてきた。しかし、今日における「帰属」ニーズが、もはや「近代家族」への回帰や家族愛の賛美だけでは実現し得ないことは、「ケア」における「影」の部分、「ケア」を媒介とする支配や暴力からも明らかである。福祉国家が「非人称的連帯」を推し進め、自由と「帰属」との葛藤が多様化する過程において、「帰属」に対する新しいニーズが顕在化しつつあるのである。

イグナティエフはこのことをきちんと自覚し

ており、「帰属」に内在する問題について、次のように指摘している。「私たちが生きてゆく上で最も深く必要とする物事の多く（第一に愛情）は、必ずしも私たちに幸福をもたらさずしない」（同前、24頁）し、ましてや「誰かを強制して無理矢理に自分を愛させることなどできない」（同前、29頁）。また、「帰属」に付随する包摂性という問題は、すでに数多くの歴史的事実が示している。それゆえに「帰属」の「場」とは、永続的で安定的なものではなく、むしろ複数の選択肢、他にもあり得る可能性に常に開かれていなければならない。「近代性が可能にする帰属は、この人格やあの家族への帰属、人生の特定の時期でこの集落、あの場所に帰属するというように、局所的で特定のかつ束の間のものであらざるを得ない」（同前、120 - 121頁）ものなのである。

このことは、「ケア」をめぐるアポリアを考える際にも、重要な知見を私たちにもたらししてくれる。自由と「帰属」との間の葛藤の多様化とは、「近代家族」という親密圏に一元化させられてきた「帰属」の「場」の新たな模索を意味しており、それは、「社会化」か「親密性」かという二極分化とは異なる新しい論理を必要としている。その論理とは、「ケア」をめぐるアポリアを、「スペクトラム」、すなわち連続体として捉えなおす知的営為によって見いだされるものであり、換言すれば、「社会化」と「親密性」との中間に存在する多様な「ケア」のあり方に注目することに他ならない。

### おわりに - 課題としての「親密圏」

「完全に帰属してしまうのではなく、また同時に、完全に離脱してしまうのでもない」（金田、2000、170頁）「帰属」のあり方は、実際の対人援助領域でも模索されはじめている。たとえば岩崎晋也（2002）は、「理解し合える関

係性を作り出す援助」のあり方として、地域精神保健福祉活動の取り組みに注目している。セルフ・ヘルプグループ（Katz, 1993=1997：久保他、1998）やボランティアなども、緩やかな「帰属」の場として位置づけることができるだろう。「修復的司法（restorative justice）」という、司法分野における加害者と被害者との関係再構築の試みは、援助観の問い直しという意味においても、新しい「帰属」への援助実践としても、非常に示唆に富む実践である（Consedine, 1999=2001：Strang, et. al, 2001）。

しかし、「ケア」というパースペクティブを対人援助領域において展開するには、依然として理論的課題が残されていることもまた事実である。「ケア」を媒介とする関係性における非対称性という問題は、「ケア」論の重要な理論的課題のひとつである。とりわけ筆者が注目するのは、「ケアモデル」としての役割を果たしてきた母 - 子関係である。従来「親密圏」と同義と見なされてきた「近代家族」を、ジェンダーの視点だけではなく、親子という視点から問い直すこと、子どもをめぐる多様な関係性の見直しとそれを通じた「親」のあり方をどのように定義しなおすことができるか。「ケア」というパースペクティブにおいて、「親密圏」の有り様が問われている。

### 注

- 1) ケアの語源と定義については、ケネディ研究所の『バイオエシックス百科事典』改訂版（1995年）がもっともよく参照されている（Reich, 1995.）。ライヒによれば、「ケア」という概念の歴史からは、統一された考え方ではなく、複数の内容が見いだされているが、4つの基本的な意味が含まれている。第一に語源（kar, caru）における、苦悩や精神的な苦痛あるいは不安。第二に人に対する関心や考え方。第三は相手あるいは自分自身への責任あるいは注意。第四に人あるいはその成長に対する働きかけとしての「ケア」。こうした基本的な要素から、「ケア」

- には、負担・重荷と配慮という2つの対抗的な意味が包含されていることがわかる。また、日本への「ケア」概念の導入は、第二次世界大戦直後のアメリカ占領軍によるケア物資の提供を契機としており、Cooperative for American Remittances to Everwhere, Inc.の頭文字(CARE)と表現されていたものであるということがすでに指摘されている(日野原, 1999)。
- 2) しかし松川俊夫も指摘しているように、CureとCareは連続的過程であり、したがって二律背反的な概念ではない。欧米圏では、Cureの代わりに、Care of, CareのかわりにCare forが用いられている(松川, 1998)。
- 3) ギリガンは1993年の新しい序文の中で、様々な反響や批判にもかかわらず、この本を改訂しなかったことについて、この本が、世界の声が変わり続ける終わりなき歴史的過程の一部であり、あくまでも「新しい会話のスタート」であると述べている(Gilligan, 1993)。
- 4) 雑誌『Signs』では、ギリガンの『もう一つの声』が出版された1986年に、この問題についての特集が組まれている。On In a Different Voice: An Interdisciplinary Forum, in: *Signs* 11[2]: 304-324.
- 5) 竹山重光(1998)は、ノッティングスの問題点として、ケア理解の狭さ、個別性の強調という点を指摘している。
- 6) 立命館大学人間科学研究所でも、2001年から、「ケア新時代 - 対人援助のフロンティアと臨床の知」と題した連続研究会を継続的に行い、多様な対人援助分野でのとり組みについての臨床的研究に着手している(学術フロンティア推進事業プロジェクト研究シリーズ, 2002)。
- 7) ハートは、「感情労働emotional labor」ではなく、「情動労働(affective labor)」という概念を用いているが、この論文では「感情労働」とほぼ同義で用いられている。
- 8) 本節については、金田(2000)の第2章、第3章が参考になった。

## 【参考文献】

- 池川清子, 1996, 『看護 生きられる世界の実践知』ゆみ出版
- 市野川容孝, 2000, 「ケアの社会化をめぐる」『現代思想』28[4]: 114 - 125頁
- 岩崎晋也, 2002, 「なぜ『自立』社会は援助を必要とするか 援助機能の正当性」古川孝順・岩崎

- 晋也・稲沢公一・児島亜紀子『援助するということ 社会福祉実践を支える価値規範を問う』有斐閣
- 上野千鶴子・春日キスヨ・市野川容孝, 2002, 「介護の社会化 新たな領域の発見」『現代思想』30[7]: 58 - 87頁
- 大村英昭編, 2000, 『臨床社会学を学ぶ人のために』世界思想社
- 岡原正幸・山田昌弘・安川一・石川准, 1997, 『感情の社会学 エモーション・コンシャスな時代』世界思想社
- 学術フロンティア推進事業プロジェクト研究シリーズ, 2002, 『対人援助のための「人間環境デザイン」に関する総合研究プロジェクト』立命館大学人間科学研究所
- 掛川典子, 1993, 「フェミニスト・エシクスの諸問題」『女性文化研究所紀要』11: 31 - 40頁
- 加藤尚武・加茂直樹編, 1998, 『生命倫理学を学ぶ人のために』世界思想社
- 春日キスヨ, 1998, 『介護とジェンダー』家族社
- 春日キスヨ, 2001, 『介護問題の社会学』岩波書店
- 金井一薫, 1998, 『ケアの原形論 看護と福祉の接点とその本質』現代社
- 金田耕一, 2000, 『現代福祉国家と自由 ポストリベラリズムの展望』新評論
- 加茂陽, 1998, 『ヒューマンサービス論 その社会学理論の批判的吟味』世界思想社
- 川崎賢子・中村陽一編, 2000, 『アンペイド・ワークとは何か』藤原書店
- 川本隆史, 1995, 『現代倫理学の冒険 - 社会学理論のネットワークへ』創文社
- 久保紘章・石川到寛編, 1998, 『セルフヘルプ・グループの理論と展開 わが国の実践をふまえて』中央法規出版
- ローレンス・コールバーグ, アン・ヒディングス著, 岩佐信道訳, 1987, 『道徳性の発達と道徳教育 - コールバーグ理論の展開と実践』広池学園出版部
- 小嶋理恵子・斎藤真緒, 2002, 「ワークショップ『ペアレントエデュケーションの理論と実際』日本におけるParenting Educationの可能性」『人間科学研究』第5号237 - 246頁
- 斎藤真緒, 1999, 「現代における母子関係の意味変容 ウルリッヒ・ベックの「個人化」論を手がかりとして」『立命館産業社会学論集』35[1]: 125 - 141頁
- 斎藤真緒, 2000, 「親性の『個人化』 家族の分析

- 視角としての『個人化』論の可能性』『立命館産業社会論集』36 [ 3 ]: 49 - 69 頁
- 佐藤和夫, 1996, 『『親密圏』としての家族の矛盾』女性学研究会編『女性学研究第4号 女性がつくる家族』勁草書房, 112 - 130 頁
- 佐野安仁・吉田謙二編, 1993, 『コールバーグ理論の基底』世界思想社
- 渋谷望, 2000, 「魂の労働 介護の可視化 / 労働の不可視化」『現代思想』28 [ 4 ]: 80 - 89 頁。
- 杉本喜代栄編, 2000, 『ジェンダー・エシックスと社会福祉』ミネルヴァ書房
- 高橋隆雄, 2001, 「ケア論の素描と本書の構成」中山将・高橋隆雄他編『ケア論の射程』九州大学出版会, 1 - 23 頁
- 立山善康, 1990, 「実践的課題としての『ケアリング』について」関西倫理学会編『現代倫理の課題』晃洋書房
- 立山善康, 1995, 「正義とケア」杉浦宏編『アメリカ教育哲学の動向』晃洋書房, 348 - 364 頁
- 田間泰子, 2001, 『母性愛という制度 子殺しと中絶のポリティクス』勁草書房
- 内藤和美, 1990, 『『母性』概念の発展的解消から再構築へ』『昭和女子大学女性文化研究所紀要』6 : 75 - 88 頁
- 内藤和美, 1991, 『『母性』を問う 『母性神話』の解説』『昭和女子大学女性文化研究所紀要』7 : 29 - 42 頁
- 内藤和美, 2000, 「ケアの規範」杉本喜代栄編『ジェンダー・エシックスと社会福祉』ミネルヴァ書房, 56 - 73 頁
- 中岡成文, 2001, 『臨床的理性批判』岩波書店
- 中村直美, 2001, 「ケア, 正義, 自律とバターナリズム」中山将・高橋隆雄他編『ケア論の射程』九州大学出版会, 91 - 116 頁
- 中山将・高橋隆雄他編, 2001, 『ケア論の射程』九州大学出版会
- 西田英一, 1995, 「新たな法主体の可能性 - コールバーグ・ギリガン論争を出発点に」『法学論叢』137 [ 1 ] 74 - 98 頁, 139 [ 1 ] 65 - 88 頁
- マイケル・ハート, 1999, 「情動にかかわる労働」『思想』896 : 16 - 29 頁
- 服部高宏, 2000, 「法システムと『思い遣りの倫理』 - 看護理論をめぐる議論を手がかりに」三島淑臣他編『人間尊厳と現代法理論』成文堂, 587 - 607 頁
- ラセル・パレーニャス, 2002, 「グローバリゼーションの使用者 - ケア労働の国際的移動」『現代思想』30 [ 7 ]: 158 - 181 頁
- 日野原重明, 1999, 『ケアの新しい考えと展開』春秋社
- 広井良典, 2000, 『ケア学 - 越境するケアへ』医学書院
- 藤野寛, 2000, 「家族と所有」大庭健・鷲田清一編『所有のエチカ』ナカニシヤ出版, 103 - 123 頁。
- 藤野寛, 2000, 『アドルノ / ホルクハイマーの問題圏』勁草書房
- 古川孝順・岩崎晋也・稲沢公一・児島亜紀子, 2002, 『援助するということ - 社会福祉実践を支える価値規範を問う』有斐閣
- 三品 ( 金井 ) 淑子, 1998, 「新たな親密圏と女性の身体の居場所」野家啓一・村田純一・伊藤邦武・中岡成文・内山勝利・清水哲郎・川本隆史・井上達夫編『新哲学講義 6 共に生きる』岩波書店, 69 - 104 頁
- 森村修, 2000, 『ケアの倫理』大修館書店
- 山岸明子, 1995, 『道徳性の発達に関する実証的・理論的研究』風間書房
- Baier, Annette, 1992, What Do Women Want in a Moral Theory? in: Larrabee, Mary Jeanne, *An Ethic of Care: Feminist and Interdisciplinary Perspectives*, Routledge: 19-32.
- Baier, Annette, 1995, The Need for More than Justice, in: Held, Virginia (ed.), *Justice and Care*, Westview Press: 47-58.
- Clement, Grace, 1996, Care, *Autonomy and Justice: Feminism and the Ethics of care*, Westview Press.
- Consedine, Jim, Helen Bowen, 1999, *Restorative justice: contemporary themes and practice*, Lyttelton: Ploughshares Publications. ( = 前野育三・高橋貞彦監訳, 2001, 『修復的司法 現代的課題と実践』関西学院大学出版会 )
- Everingham, Christine, 1994, *Motherhood and Modernity: An Investigation into the Rational Dimension of Mothering*, Buckingham: Open University Press.
- Gilligan, Carol, 1982, *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*, Cambridge: Harvard University Press. ( = 1986, 岩男寿美子監訳『もう一つの声 : 男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』川島書店 )
- Gilligan, Carol, 1986, Replay to Critics, in: *Signs: Journal of Women in Culture and Society* 11[2]: 318-324.
- Gilligan, Carol, 1993, New Introduction, in: Carol

- Gilligan, *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*, Cambridge: Harvard University Press.
- Held, Virginia (ed.), 1995, *Justice and Care*, Boulder: Westview Press.
- Himmelweit, Susan, 1995, The Discovery of "Unpaid Work": The Social Consequences of the Expansion of "Work", *Feminist Economics*, 1[2], (= 1996, 久場嬉子訳「“無償労働”の発見：“労働”概念の拡張の社会的諸結果」『日米女性ジャーナル』20: 116 - 136頁)
- Hochschild, Arlie, 1983, *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*, Berkeley: University of California Press. (= 石川准・室伏亜希訳, 2000, 『管理される心 - 感情が商品になるとき』世界思想社)
- Hochschild, Arlie, 1989, *The Second shift: Working Parents and the Revolution at Home*, New York: Viking. (= 田中和子訳, 1990, 『セカンドシフト - アメリカ共働き革命のいま』朝日新聞社)
- Ignatieff, Michael, 1984, *The Needs of Strangers*, New York: Penguin Books. (= 1999, 添谷育志・金田耕一訳『ニーズ・オブ・ストレンジャーズ』風行社)
- Ignatieff, Michael, 1993, *Blood and belonging: journeys into the new nationalism*, London: BBC Books. (= 幸田敦子訳, 1996, 『民族はなぜ殺し合うのか 新ナショナリズム6つの旅』河出書房新社)
- Ignatieff, Michael, Amy Gutmann (eds.), 2001, *Human rights as politics and idolatry*, Princeton: Princeton University Press.
- Jamieson, Lyn, 1998, *Intimacy. Personal Relationships in Modern Societies*, London: Polity Press.
- Katz, Alfred H., 1993, *Self-help in America: a social movement perspective*, New York: Twayne. (= 久保絃章監訳, 1997, 『セルフヘルプ・グループ』岩崎学術出版社)
- Kohlberg, Lawrence, Charles Levine, Alexandra Hewer, 1983, *Moral stages: a current formulation and a response to critics*, New York: Karger. (= 片瀬一男・高橋征仁訳, 1992, 『道徳性の発達段階 コールバーグ理論をめぐる論争への回答』新曜社)
- Kuhse, Helga, 1997, *Caring: Nurses, Women and Ethics*, Blackwell Publishers Limited. (= 2000, 竹内徹・村上弥生訳『ケアリング 看護婦・女性・倫理』メジカ出版)
- Larrabee, Mary Jeanne, 1992, *An Ethic of Care: Feminist and Interdisciplinary Perspectives*, New York: Routledge.
- Noddings, Nel, 1984, *Caring: A Feminine Approach to Ethics and Moral Education*. University of California Press. (= 1997, 立山善康他訳『ケアリング 倫理と道徳の教育 - 女性の観点から』晃洋書房)
- Reich, Warren Thomas, 1995, *Encyclopedia of Bioethics, Revisited Edition*, New York: Simon & Schuster Macmillan.
- Ruddick, Sara, 1995, Injustice and Families: Assault and Domination, in: Held, Virginia (ed.), *Justice and Care: Essential Readings in Feminist Ethics*, Boulder: Westview Press, 203-223.
- Smith, Pam, 1992, *The Emotional Labour of Nursing*, London: Macmillan Press. (= 2000, 武井麻子・前田泰樹監訳『感情労働としての看護』ゆみる出版)
- Strang, Heather, John Braithwaite, (eds.), 2001, *Restorative justice and civil society*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Tronto, J. C., 1987, Beyond gender difference to a theory of care, in: *Signs: Journal of Women in Culture and Society*, 12[4]: 644-663.
- Turney, Danielle, 2000, The feminizing of neglect, in: *Child & Family Social Work*, 5[1]: 47-56.
- 1986, On In a Different Voice: An Interdisciplinary Forum, in: *Signs: Journal of Women in Culture and Society* 11[2]: 304-324.

(2002.12.17. 受理)